松山翔吾君、慶吾君主演「絵の中のぼくの村」ベルリン国際映画祭で栄冠

翔吾君が大きな鯉と戯れるシーン。現場の人たちは大笑いでした。

映画のクランクアップ記念パーティーでご自身も双子の田島征三さん（原作者）と一緒に。

二月二十六日、ドイツの首都ベルリンで行われた世界三大映画祭の一つ、ベルリン国際映画祭で、本県出身の絵本作家、田島征三さん原作の「絵の中のぼくの村」（東陽一監督）が、見事、準グランプリに当たる銀熊賞を受賞しました。

この映画に主演したのは、稲生小学校に通う双子（当時二年生）、松山翔吾君と慶吾君。二人のおばあちゃんが知り合いに進められ、面白そうだからと気軽な気持ちでオーディションに応募したのがきっかけ。合格の電話が家にはいったときには、ご家族みんながあわてたとか。

この映画、ご自身が双子である原作者田島征三さんが、幼いころ、高知県の田舎で過ごしたときのことを綴ったエッセイをもとに、自然の生き物たちと双子のいきいきとしたふれあいを描いたファンタジー。

撮影は吾北村、春野町、日高村など県内各地で行われました。身内が近くにいると、撮影がやりにくいということで、ご家族は三回くらいしか撮影現場には行ってないそうです。

さて、主役の二人はというといたってマイペースで、心配されたセリフ覚えも難無くこなし（人のセリフまで覚えてしまい、自分のセリフと区別するのに苦労したとか）、撮影も順調に進みました。「どしゃ降りの中を走るシーンで風邪をひきかけてしんどかった」（慶吾）、「裸でたらいに入って鯉と遊ぶシーンが楽しかった」（翔吾）とのこと。また、兄弟げんかをするシーンでは、本気と見まがうほどの迫真の演技を見せたあと、慶吾君が「今のシーンはOKですか」と役者らしさを見せ、監督をうならせたとか。

監督、共演者らとドイツのホテルで

ともあれ、それぞれにとって思い出深かった今回の撮影、ベルリン国際映画祭で準グランプリに選ばれましたが「もう一度映画に出れたら、今度はグランプリにチャレンジしたい」と二人は夢を語ってくれました。

学校での二人は

「絵の中のぼくの村」の撮影中は小学校二年生だった翔吾君と慶吾君。現在は三年生になり、毎日、友達と楽しく過ごしています。クラスメイトによると「普段はニコニコしているけど言い出したらきかない頑固なところがある」そうで、怒ると結構こわいそうです。ボールのぶつけあいなどをたまにするそうですが、なかなかすばしっこいとか。以前はサッカーや野球もやっていたそうです。

映画に出演することが新聞に出た日、みんなが校門の前で翔吾君と慶吾君を出迎えました。二人がオーディションの様子をみんなの前で再現してみせたり、友達役のオーディションにみんなが応募するという案も出たりしたそうで、クラス全体が大騒ぎになりました。当時の担任の秦泉寺典子先生は「夏休み前に撮影に入ったため、暑さでたいへんだったようで、みんなが二人を励ましていました。一度おねしょのシーンのロケを見に行ったんですが、クラスのみんなも連れて行ってあげたかったです」と残念そう。完成した作品を観たときは「普段見せてもらえない二人を見せてもらえたし、二人らしさがよく出ていた」と感動もひとしおだったそうです。

慶吾君

クラスのみんなと教室で

現在の担任、橋詰宏文先生によると「自分の世界を持っているし、個性が強い。おっとりしているけど、言うべきところはしっかり言える」とのこと。二人とも性格が全然違うようで、友達たちはすぐに見分けがつくそうです。

めったにできない貴重な体験をした翔吾君と慶吾君。いつまでもこの思い出を忘れずに、思いやりを持って成長してほしいものです。

お兄ちゃんの翔吾君